

東福寺 阿弥陀如来の縁起（上）

春日部市大字八丁目二一四番地に、新義真言宗智山派正向院菩提山東福寺と云う寺がある。

この寺に親鸞上人直筆の阿弥陀如来立像の画がある。絹地丈八十七センチ、幅三十四センチに描かれている。寺の縁起によると、武蔵国を遍歴した親鸞上人が当地に来たとき、帰依した修験者東覚坊の草庵に逗留、敬慕する東覚坊のために描き与えたものであると伝えられている。

東福寺に所蔵されている、親鸞直筆の阿弥陀如来略縁起にはつぎのように記されている。

武蔵国勝鹿郡菩提山東福寺に安置し奉る阿弥陀如来略縁起

そもそも、この阿弥陀如来の濫觴らんちようをたずぬるに、親鸞上人三十五歳の御年、越後の国へ御流刑の御身とならせられ、五ケ年の間御化導あらせ、それより常陸の国笠の郡稲田と云うところに、しばらくうつせ給ひしに、さびしく暮らすといへども通俗跡をたずね、法筵招かずとも貴賤場に集まり、仏法弘道の本懐、ここに成就し衆生済度の宿願、たちまちに満足す、聖人の教えを受けるともがら、専ら如来の本願に吸し、念仏安心のおも

むきを極むる人、やがて浄土真門に赴く者、あげてかぞえがたし、しかるに昔、えんの行者の流れを汲み、修験道の棟梁たるものにて、備前の僧都、義道坊弁鸞と申す山伏あり、常に聖人の正法を妨げんことを好み、或時ひそかに聖人を害したてまつらんとして、尊顔にむかへば、正法のありがたさに害意忽ち消滅して、あらおそろしのが身かなと、先非後悔の涙にむせび、即ち一念得度して、柿の衣を改め、聖人の御弟子となり、法名を明法房とたまわり、明け暮れ給仕し奉り、武蔵国は勝鹿郡なりたるころにて、五月雨、降る里遠き吾妻路に宿をこわんと折しもよしや幸手なる八丁目の郷につき給へど、土民御宿申されば、つれなく夕暮渡る武蔵野に一夜を明けさせ給うところ、かりねせん旅の衣、墨ぞめぬれてや暗きたそがれに、ここかしこたずね給うに、柴のいほりかすかなる灯のありけるを、いざ立ちよつて問い給うに、備前の国、弁えんの末派、東覚坊となりし山伏のすみかにてありけり。

東覚坊もかねて、貴ひじりの御身なれば、草のいほりの席にいざない御宿申し奉りしに、終夜生死無常のありさま、造悪不善の凡夫六趣四生の内ならでは赴くべき方もなく身なるを、如来願力の不思議にぐうすれば速やかに極楽往生安養浄刹往生を遂げるものなりと、ねんごろに仏道修行のおん教化ありければ東覚坊も仏恩の

深重なることありがたく思い、聖人を敬崇したてまつり、御教化の御衣にすがり、お別れおしといへども、東覚坊せんかたなければ、深くお名残り慕いかければ、聖人も賢くお思召され、御形見阿弥陀如来の尊像を画き授けたまへば、東覚坊も歓喜礼拝して供養し奉り、秘蔵して、東覚坊の後胤に永く伝えさせ給う。

即ちこの如来像なり。

つづく

初出「広報かすかべ 昭和五十五年十月」かすかべの歴史余話